

過去のライフイベントの捉え方と生活満足度・将来展望・

死に対する態度の関連

羽坂雄介* 岡本祐子**

Relationship between how people dealt with events in their life, life satisfaction rating, view of the future, and attitude to death.

Yusuke Hazaka · Yuko Okamoto

This research paid particular attention to senior citizens attitudes towards life and death, to find out distinctive features of "how people dealt with events in their life", "how people deal with their present life", "view of the future", and "attitude towards death", and the relationship between each was examined.

As a result, some of the same distinctive features were found in "how people deal with their present life", "how to deal with present life", and "view of the future".

Moreover, four features; "no fear of death", "existence of a life after death", "existence of religion", and "influence of the death of a person you know" were common to four cases in the attitude towards death. Moreover, through case analysis, relationships were found between "how people dealt with events in their life", "how people deal with their present life", "view of the future", and "attitude towards death",

Key word : life event, view in the future, attitude to die, senior citizen

問題と目的

近年、日本では高齢化社会のもたらす問題が取り上げられることが多い。高齢者の問題として加齢に伴う身体的な衰え、認知機能の衰退、対人関係の縮小・喪失などのマイナス面がよく取沙汰される。そのなかで高齢者がいかに幸せに生きられるか、そのために何ができるのかといった点に着目することが必要である。

*広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター(Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

**広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

Erikson(1950)によると老年期は「精神分析的個体発達分化の図式」の最終段階にあたりこの段階での心理社会的危機は「統合性 対 絶望」とされている。この自我の統合は自分の人生を代替不能のかけがえのないものとして肯定的に受容すること、また自らの死を受容することを意味している。また老年期における心理社会的課題として Peck(1955)は①引退の危機、②身体的健康の危機、③死の危機の 3 つをあげている。本研究では特に「死の危機」に着目する。死の受容プロセスとして Kubler=Ross (1969) は①否認、②怒り、③取引、④抑うつ、⑤受容という 5 つの段階をあげている。また 柏木(1982)はホスピスの患者の苦痛として、①身体的苦痛、②精神的苦痛、③社会的苦痛、④宗教的苦痛があると述べている。この中の精神的苦痛を和らげるために心理的介入が必要であると考えられ死の不安、または死の受容に関する様々な研究が行われている。

河合 (1996) は死の不安尺度を用いて 60 歳以上の高齢者に対し調査を行っている。その結果「私は死ぬのがとても怖い」という項目では約 75%の人が「いいえ」と回答している一方、「私は死ぬことをまったく恐れていない」という項目では「はい」の回答をした人は 55%にすぎなかった。このことから死に対する態度は揺らぎやすく、不安定なものであることがわかる。また河合ら(1996)は死の不安・恐怖と関連する要因として、「年齢」・「経済状態」・「配偶者の有無」、「子ども数」を、死の受容に関連する要因として「年齢」・「経済状態」・「健康状態」、「信仰」、「家族の有無」、「死別体験への関わり方」を挙げており、これは年齢が高い、経済状態が良い、信仰があるほど死への恐怖は少ないことを示している。

田中ら(2002)は老年期の死生観と終末期医療に対する意識を明らかにすることを目的とし、245 名の在宅老人に質問紙調査を行った。その結果、「死を考える」因子、「死の不安・恐怖」因子において女性が有意に高いことが明らかになり、老年期の女性に対する死の教育の重要性が示唆され、また終末期医療に関しては「在宅での死を望む」といった考えが多くを占めている。Woods & White (1981)は死の受容とアイデンティティ達成度の関連について研究しており、アイデンティティ達成度が高いほど、死への不安が少ないという結果を導き出している。このように死の受容と関連する要因は様々であり、そのプロセスも生きてきた歴史や培ってきた心理的背景、現在の環境などによって様々に異なってくると考えられる。そこで人々の背景・多様性を知る手段としてライフレビューが挙げられる。河野 (1994) は老年期の「死の臨床」においては過剰な介入はすべきではないとし、それゆえ「spiritual program」としての音楽療法やライフレビュー療法の重要性を唱えている。

そこで死の受容・人生の統合に重要な役割を果たす作業としてライフレビューがあげられる。ライフレビューとはこれまでの自分の人生を振り返り、自分を問い直す作業である。Butler (1963) は高齢者やターミナル期の患者がよく過去を回顧することは人生の終焉に近づき、死を意識することによって自分の人生を何とかまとめようとする心の営みであると考え、ライフレビューは過去の経験を再統合し、自分の人生の意味を確認し、死への準備につながると述べている。従来、高齢者が内省や追憶に向かう傾向は記憶を損なっていることの指標として否定的に捉えられていたが、このように Butler (1963) が「死を前にすることによって活性化した回顧過程であるライフレビューは、自然で普遍的な過程であり、過去の経験を積極的に知覚し、未解決の葛藤を再考し、潜在的に人格の再構成へと進んでいくものである」と述べたことにより、過去の回想、再評価が肯定的に見

られるようになった。また、柏木（1982）はターミナルケアにおいて、死そのものに焦点を当てるのではなく、生命の質に重きをおき、患者の生きてきた過去、自分の為してきた仕事、自分の築いてきた家庭などの人生の総決算のときに、患者の生き様に受身の踏み込みをし、患者とともに生き抜くことが重要であると述べている。つまり、人生で為しえなかった経験やこれからをどう生きるかということがとても重要だと思われる。また長田（1989）は老年期における過去の回想および過去の満足度が、現在の満足度や未来意識にどのように関連しているかについての検討を目的として、質問紙調査（①過去回想傾向、②過去の満足度、③現在の満足度、④未来展望、⑤死の意識、⑥死の不安）を行い、「過去回想傾向低群は現在満足度が高い」、「過去の満足度の高群は、現在の満足度が高い」、「過去満足度高群に高い未来展望がみられた」、「過去回想傾向の高い人は、死に対する意識が低い」、「過去満足度低群により高い死の不安が示された」という結果を導き出している。この研究から現在の満足度が低い人は過去を思い出しやすく、過去の満足度が高い人は現在満足度、未来展望ともに高く、死への不安も低いことがわかった。つまり、過去に対する満足度を高めることが、現在の生活を豊かにし、未来への明るい展望につながるのではないだろうか。

これまでの研究で回想やライフレビューが将来の展望を肯定的にする機能を持っていることが示された。しかし、その影響要因は明らかになっておらず、その要因は数量的に示されたものが多い。また過去の捉え方、現在の生活、将来展望といっても様々であり、それぞれのどのような部分が関連しているかを捉える必要があるため、また個人の人生における様々な体験を捉え、関連を検討するため、本研究では質的アプローチを採用することとした。

そこで、本研究では①高齢者の過去のライフイベントに対する捉え方、現在の生活に対しての捉え方、死に対する態度、将来展望を把握すること、②またそれぞれの関連を調べることで、③死の受容や態度がどのような要因と関連しているのかを質的に捉えるとともに、その考え方が現在の生活や、過去のライフイベントなどどのように関連しているのかを検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象者

H 県の A 老人保健施設の 81 歳～91 歳までの高齢者 4 名を対象に面接調査を行った。対象者の選択方法として施設内で言語能力が良好な高齢者 4 名を紹介していただき、調査協力者とした。

各調査協力者のプロフィールは Table 1 に示す。

Table 1 調査協力者のプロフィール

	事例 A	事例 B	事例 C	事例 D
性別	女性	女性	女性	女性
年齢	84 歳	91 歳	81 歳	83 歳
入所歴	3 年	1 年	9 年	1 年
入所理由	自宅の階段から転落	腰痛	左下腿蜂窩織炎のため在宅困難	足の病気
家族構成	夫死亡、義理の息子	夫死亡、子供 4 人	夫、子供 2 人	夫死亡、子供なし

過去の仕事	農業	農業	農業	農業, 商業
病歴	脳梗塞, 左半身麻痺	腰痛, 慢性心不全	左半身麻痺, 脳梗塞, 直腸がん	右変形股関節症 左変形膝関節症
生活状態	歩行器使用	車椅子使用	杖使用	車椅子使用
面接回数	9回	6回	6回	6回

2. 実施時期

2005年4月～12月にA老人保健施設の相談室で面接調査を行った。なお面接は個別に6～9回行った。

3. 手続き

まず、面接調査の概要を説明し、録音の許可をとり、自由意志のもと面接を開始した。「あなたの人生の歩みをできるだけ詳しくお話してください」と教示し、調査協力者に人生の歩みを語ってもらい、一通り聴取し終えた後、補足的に各ライフイベント（幼児期の生活、学校生活、結婚、仕事、病気など）について語ってもらった。第2回目からは簡単なライフヒストリー表を作成し、調査協力者が話しやすいように補助的に提示し、面接を進めた。ライフイベントを含む人生の歩みを一通り語ってもらった後に、半構造化面接を行った。面接項目として将来展望、死に対する態度、人生で遺り残したことを、現在の生活を設定した。

4. 分析方法

以下の手順で分析を行った。①逐語録を作成した。②事例ごとに簡単なライフヒストリー表を作成した。③各ライフイベントについてそれぞれの発言内容の整理をおこなった。項目は過去の様々な出来事（幼児期、学校、結婚、仕事、病気）である。④発言内容からそれぞれに共通する特徴を抽出し、それぞれに考察を加え、高齢者の過去の捉え方の特徴を分析した。⑤次に、半構造化面接で尋ねた項目（将来展望、死に対する態度、人生で遺り残したことを、現在の生活）についてそれぞれの発言内容の整理を行った。⑥③と同様に共通する特徴を抽出し、考察を加え、各項目に関する高齢者の特徴を分析した。⑦次に事例の概要を記述し、各ライフヒストリー表のライフイベントに対応した発言内容を整理した。⑧ライフイベントごとに語りの特徴を記述した。⑨③から⑥で抽出された特徴を事例ごとに整理し、事例の理解を記述した。⑩死に対する態度を軸とし、各ライフイベントの捉え方や半構造化面接で尋ねた項目との関連を分析した。⑪最後に総合考察を加えた。

結果

1. ライフイベントの分析

逐語録に基づいて、面接で尋ねたライフイベントごとに発言内容を抽出し、その発言内容を基に特徴を抽出した。以下の表はその一例である幼児期の発言内容と特徴である(Table2)。

Table 2 4事例の幼時期の特徴

特徴	発言内容例	対象者
親, 養育者への感謝	「やさしかった」, 「父は警察官だったからきびしかったけど, 可愛がってくれた」, 「父は主人にも良くしてくれた」, 「おばあさんに仏教的なことを教えていただいた」, 「厳しかったけど好きだった」	A, B, D
兄弟の世話	「子守をしていた」, 「妹の面倒をよく見ていた」, 「母が弱かったから, 子守していた」	A, C, D
お寺への参拝	「よくお寺で経本を読んでいた」, 「お寺の側でいつも聞かせていただいて, 鐘をつく遊びなどをしてとても心が嬉しい」, 「子供のころから寺に行っていた」	A, B, C

またそれぞれのライフイベントにおいて抽出された特徴を事例ごとにまとめた (Table3). その結果, 幼児期では「親, 養育者への感謝」, 「兄弟の世話」, 「お寺への参拝」, 学校時代では「学校への肯定的評価」, 「学校への否定的評価」, 成人期 (結婚・子供) に関しては「結婚, 子供に対する肯定的評価」と「否定的評価・諦め」, 仕事に関しては「仕事に対する肯定的評価」と「仕事に対する否定的評価」, 病気に関しては「ショック, 諦め, 情けなさ」, 「病気による再発見, 感謝の芽生え」, 「死の意識」がそれぞれ特徴として抽出された.

Table 3 各ライフイベントに対する各事例の発言の特徴

ライフイベント	事例Aの特徴	事例Bの特徴	事例Cの特徴	事例Dの特徴
幼児期の生活	親, 養育者への感謝, 兄弟の世話, お寺への参拝	親, 養育者への感謝, お寺への参拝	兄弟の世話, お寺への参拝	親, 養育者への感謝, 兄弟の世話,
学校時代	学校への否定的評価	学校への肯定的評価	学校への否定的評価	学校への肯定的評価
結婚	否定的評価, 諦め	結婚, 子どもへの肯定的評価	否定的評価, 諦め	結婚, 子どもへの肯定的評価
仕事	肯定的評価	肯定的評価	肯定的評価	肯定的評価
病気	ショック, 諦め, 情けなさ, 病気による発見, 感謝の芽生え, 死の意識	なし	ショック, 諦め, 情けなさ, 病気による発見, 感謝の芽生え, 死の意識	ショック, 諦め, 情けなさ

2. 将来展望, 死に対する態度, 現在の生活に対する捉え方の高齢者の特徴

まず将来展望に関する発言内容を抽出し, 発言内容を基に「将来に対する肯定的評価」と「否定的評価」の二つの視点に基づき, 特徴を抽出した. その結果, 「将来に対する肯定的評価」と「否定的評価」の下位分類としての「絶望」, 「諦め」の二つ, そして背景として「子孫の存在の影響」の計四つの特徴が抽出された (Table4). 「肯定的な将来展望」が事例A, C, 「子孫の存在の影響」を持つ事例が事例B, C, 「絶望」が事例A, 「諦め」が事例Dにおいてそれぞれ見られた.

Table 4 高齢者の将来展望に関する特徴

特徴	発言内容	対象者
肯定的な将来展望	「今以上を求めていきたい」、「97 歳くらいまでは生きたい」、「ありがとうという心を中心としてやっていきたい」、「楽しい生活をしていきたい」「主人と仲良く暮らしていきたい」、「お墓に参りたい」、「10 年ほど生きていたい」	B, C
絶望	「死にたいばかり」、「希望も無い」、「なににもないです」、	A
諦め	「やりたいことはない」、「足が動かなくて仕事もできないから」、「手とかが直ったらいいとは思う。」「もう年も多し、仕事を若い者に任せているから。」	D
子孫の存在の影響	「お父さんがいた頃は、田畑を少しだけもらってそれを楽しみにしていたと思っていた」、「子供がいたらそのために田畑を作ってあげたかった」→「それもできなくなって生きがいを奪われた感じ」、「我が子だったら生きていたいと思うけど・・・」「お父さん（夫）ももういないし、実の子供もいないから」「この間までは、気をいためるなら死んでもいいと思っていたけど、最近孫の成長を見たいと思うようになった。」	A, C

次に死に対する態度に関する発言を「死への恐怖があるかどうか」、「死後の世界の存在を信じているかどうか」、「死に対する態度に宗教は影響しているか」、「身近な人の死の影響はあるか」の四つの視点に基づき、共通する特徴を抽出した。その結果、「死への恐怖の無さ」、「死後の世界の存在」、「死における宗教の存在」、「身近な人の死の影響」の四つの特徴が抽出され、それぞれに関する語り が 4 事例すべてにおいて見られた (Table5)。

Table 5 高齢者の死に対する態度の特徴

特徴	発言内容	対象者
死に対する恐怖の無さ	「私は死を恐れることはありません」、「死ぬことへの恐怖はありません」、「死ぬことは怖くない」	A, B, C, D
死後の世界の存在	「でも冥土にいつているししょうがないと思った」「冥土、三途の川、地獄がある」、「鬼や仏が導いてくれる」、「立派な人はすぐに極楽にいける」、「極楽に迎えてくれることだから」、「極楽は心がついている」、「自分が安らかにすることが大事」、「死後はいいところに行くと考える」、「死ぬことは仏さんになることと信じている」、「世の中違うから、あの世もそれぞれ違う」	A, B, C, D
死における宗教の存在	「お経さんに頼って生きていく」、「小さいときからお寺のそばで育って、おばあさんとよく話をしていた」、「小学校でおばあさんに死ぬってどういうことってたずねた」、「こどものころお寺につれてまいられたから、仏縁が強い」	A, B, C, D

身近な人の死の影響	「みんなが冥土にいるから、待っててくれよーって いう感じです」、「一人で死んでいくのは怖い」、「だ けどみんな死ぬから怖くない」、「同じ場所に集まる もの（親戚）」、「友達もたくさん死んだから影響され た」、「悲しみも薄らいでいく」、「年をとれば人は死 んでいくもの、だから怖くない」	A, B, C, D
-----------	---	------------

次に人生で遣り残したことにおける 4 事例の発言内容をまとめ、人生で遣り残したことに
関する発言を「遣り残したことをどう捉えているか」という視点に基づき、共通する特徴を抽出した。
その結果、「満足」、「諦め」、「後悔」の三つの特徴が抽出され、「満足」に関する語りが事例 A、D
において「諦め」に関する語りが事例 B、Dにおいて、「後悔」に関する語りが事例 Cにおいて見られ
た (Table6)。

Table 6 高齢者の人生で遣り残したことにおける特徴

特徴	発言内容	対象者
諦め	「ない、どうにもならんから」、「転んで脳梗塞になったから駄目 になったのおーって思った.」、「ない」、「今からこの身柄じゃし ようがない」	A, D
満足	「そう思うことはない」、「人生で遣り残した事はない」、「感謝す る事ばかりです」、「百姓もスポーツもしたし、遣り残したことは ない」、「仕事もしっかりやったから」	B, D
後悔	「母の背中を流してあげたかった」、「ここで流してもらおう事に感 謝している」、「親孝行すればよかった」、「年をとらんと分から ん」	C

次に現在の生活における 4 事例の発言内容をまとめ、「現在の生活に満足しているか」という視点
に基づき、共通する特徴を抽出した。その結果、「現在の生活への満足」、「家族への思慮」の二つ
の特徴が抽出され、「現在の生活への満足」に関する語りが 4 事例すべてにおいて、「家族への思慮」
に関する語りが事例 A、Cの 2 事例において見られた (Table7)。

Table 7 高齢者の現在の生活に対する捉え方の特徴

特徴	発言内容	対象者
現在の生活への満足	「今の生活は楽しいです」、「デイケアで足の運動を習っ てやってみようと思う」 「楽しいです」 「この環境が平 和」、「こういういい所に入れてうれしい」、「いろんなこ とを教えてもらえる」、「最高です」、「食べ物も美味い し、みんなが優しい」、「いいですよ」、「よくしてもらっ てます」 「孫も優しいし、楽しい」、「跡継ぎに指示を出すの が生きがい」	A, B, C, D
家族への思慮	「一番辛いのは帰ったときに“忙しいのに帰ってきてから に！”と言われる事.」 「今は減多に帰らんけど、隠れる事 が・・・」、「なんで隠れるのかが分からない」、「いじめて きたわけでもないのに」、「そこがちょっと気持ち悪い」	A, C

「神経が知りたい」、「ただ〇〇にいる妹のことが気にかかる」、「体は大丈夫だろうか」、「お金はあるのだろうか」、「妹の子どものことも心配」、「中々連絡が取れない」
--

考察

1. 各ライフイベント、現在、将来に対する捉え方の特徴

ライフイベントの捉え方として4事例ともに幼児期においては親が厳しく、忙しかったにもかかわらず、調査対象者の親への評価は肯定的であり、兄弟の世話をよくしていたことが明らかになった。

また、お寺への参拝に対する語りはどれも自発的であったため、お寺というものが高齢者の幼児期の生活に強く密着していたことが明らかになった。学校時代においては肯定的評価が2事例見られたが、そのうち事例はBは学校の教えそのものに対する感謝の現れであり、事例Dは友達存在が肯定的評価に寄与している。また、否定的評価に関しては、事例Aが病気による学力の低下が原因であり、事例Cが家の仕事が頭の中を占めていたためというように質的には異なる。このことから学校に対する評価にも病気や家庭の問題など様々な要因が関連しているといえる。

結婚においては結婚のきっかけはすべて親戚の紹介であり、そのため望んだ結婚ではなく否定的な評価が語られたと思われる。また、結婚に対して否定的な事例A,Cは子供に対しても否定的な感情を持っており、何らかの関連が伺える。事例Aに関しては後妻であったこと、息子たちと血のつながりがないことがその要因となっているといえる。

病気においては、いずれの事例でも病気を知ったときは情けなさが一番初めに浮かんだという。これは今まで様々なことを頑張ってきた自分を健康な体とともに失ったような感覚になったからではないかと考えられる。このことは「仕事をしてきたからそうなった」、「足もたたんし」などという発言からも伺える。また、病気の後どう捉えたかに関しては、病気になったことを「年だから」というように諦めるパターンと病気になったことで人のありがたみを知ったという「感謝の芽生え」のパターンの二つに分かれている。これは病気をしたときの家族、医師のサポートが大きな要因になっていると思われる。

将来展望においては「肯定的評価」に関する事例Bは過去から続いて生活に感謝を述べているパターンであり、日々の感謝が将来を肯定的にしていると考えられる。また、「肯定的評価」のもう事例Cは孫の成長を見たいという理由が将来展望を明るくしており、「子孫の存在の影響」がプラスに働いたパターンであるといえる。一方、絶望に関する語りが見られた事例Aは「子孫の存在の影響」が負の方向に働いたパターンであるといえる。「子孫の存在」が将来展望を明るくした前者に対し、後者は「子孫の存在の無」が将来展望を暗くしているといえる。このように高齢者の将来展望には「子孫の存在の有無」が関連しているといえる。また「諦め」の語りを示した事例にも代表されるように体の不自由さが将来展望を否定的にする可能性も伺える。

現在の生活については4事例ともに現在の生活には満足しており、スタッフや施設利用者への感

謝が語られた。しかし、事例 A,C においては満足しながらも家族のことを気に病んでおり、完全に満足とはいきれない。

このように高齢者にとって家族の問題が現在の生活に少なからず影響を与えているといえる。以上のようにこれらのライフイベントの特徴はそれぞれ関連性を持っており、学校への評価に病気や家庭の問題が影響を与えており、将来展望に子供との関係が影響を与えていることなど、ライフイベントが将来展望などに影響を洗えていることが明らかになった。

2. 死に対する態度の特徴

死に対する態度においては①死への恐怖の無さ、②死後の世界の存在、③死における宗教の存在、④身近な人の死の影響の4つの特徴が全事例に共通してみられた(Table 4)。「死への恐怖の無さ」は死に対する恐怖を持っていないことを、「死後の世界の存在」は、死後の世界を肯定的に捉えていることを、「死における宗教の存在」は幼い頃の宗教との関わりが死生観に影響を与えていることを、「身近な人の死の影響」は身近な人の死が死への恐怖を低減していることをそれぞれ示している。またそれぞれの事例の死生観にも様々な特徴がみられる。

事例 A については「死への恐怖の無さ」は幼い頃の「お寺の参拝」が影響しており、幼い頃からの信仰が死への恐怖を低減していると考えられる。その信仰により冥土の存在を信じるようになった事例 A は死んだ父親や母親が冥土で待っていると信じており、このような「身近な人の死」や「死後の世界の存在」も死への恐怖を低減させていると考えられる。また、事例 A の死生観の特徴として、「死後の世界の存在」が挙げられる。事例 A は死後の世界を極楽、地獄の二つに分かれており、その間には三途の川が流れていると表現している。そして事例 A は「他の人はまっすぐ極楽へ行くけど、自分は根性が悪いから三途の川を渡って極楽に行くんじゃないか」と述べている。根性が悪いと言うのは、事例 A 曰く「他人が話していると自分の悪口をいっているんじゃないかと疑ってしまう事」であり、人生を通じて持ち続けてきた劣等感がこのような考えに影響を与えているといえ、事例 A に関しては過去の捉え方と死後の世界が関連していると言える。

事例 B は幼い頃、祖母に死について尋ねており、死とは極楽が迎えに来てくれることと捉えており、極楽はいいところであると教えられてきたため、死への恐怖が見られないと考えられる。身近な人の死の際にも極楽から迎えに来たと信じていた事例 B は「ショックはなかった」、「死について学ぶことができた」というように死をいいところに行くことと捉え続けてきた。これは子どもの頃事例 B が「よく極楽へ連れて行ってくれといていた」という発言からも伺える。事例 B にとっては幼い頃から信じてきた宗教と祖母の教えを信じぬいたことが死への恐怖を感じさせない要因になっていると考えられる。事例 C の死生観のベースとなるものは幼いころから信じている宗教であり、死後は仏になると信じており、また死後の世界はいいところであると信じている。病気になった際、「母親に会いに行ってもいいと思った」というように死後の世界が肯定的なことが E さんの死への恐怖を軽減させていると考えられる。

また事例 C は死への恐怖がない理由として多くの友達の死をあげており、その経験から「年をとれば人は死んでいくもの、だから怖くない」といった発現があるように多くの死別の経験が死への恐怖をやわらげていることが明らかとなった。

事例Dは死を怖くないというよりは考えたことがあまりないと語られる。これは本人が言うように仕事が忙しくて考える暇がなかったからである。事例Dの死後のイメージは皆異なると語られる。事例D曰く、「世の中みんな違うから、死後の世界も人それぞれ」という理由からである。事例Dについては宗教の存在も影響しているが、「一人で死んでいくのは怖い」、「だけどみんな死ぬから怖くない」と他者の死、人間の死の普遍性を理由として語っていたのが特徴的であった。

以上のことから高齢者は幼いころから宗教に触れる機会が多く、死に対する意識が高まり、また各事例それぞれ形は違うが死後の世界に肯定的なイメージを持っており、その存在が死への恐怖を低減していると考えられる。また、身近な人の死が死後の世界での再会の希望や人間の死の普遍性に対する意識を高め、死への恐怖をやわらげているといえる。高齢者は身近な人の死に触れる機会が他の世代よりも多いため、このことは高齢者特有の考え方であると考えられる。

3. 死に対する態度とライフストーリーの関連

事例ごとの分析を行った結果、それぞれ過去のライフイベントの捉え方と将来展望・現在の生活・死に対する態度に関連が見られ、過去のライフイベントを肯定的に捉えている人は上記の項目についても肯定的に捉えていることが明らかになった。

4事例のなかで唯一、過去を否定的に捉えていた事例Aは幼い頃から持ち続けている劣等感や孤独感が大半のライフイベントの捉え方を否定的なものとし、それに関連して将来展望には「絶望」、現在の生活には「家族への思慮（家族関係が気がかり）」、死に対する態度においては「他の人はまっすぐ極楽へ行くけど、自分は三途の川を渡らないといけない」など否定的な特徴が多く見られた。

事例Bは祖母の教えを人生を通して守り抜いており、死生観も祖母の教えに基づいたものとなっている。事例Cは母への否定的な感情を自分が親になることで捉え直し、病気をきっかけに死を母親に会いに行くことと捉えるようになっていく。事例Dは仕事一筋に生きてきており、様々な人と出会うことで人の価値観の違いを理解し、それに基づき、死後の世界が人によって異なるという考えを持つに至っている。

このように過去のライフイベントの捉え方や人生で培ってきた心理的背景が、死そのものに対する態度や死後の世界のイメージと密接に関連していることが明らかになった。

4. 事例の全体考察

各事例ともに共通しているのは過去のある出来事に関する感情が現在の生活や将来展望に何らかの影響を与えているという点である。これは人生で培ってきた心理的背景、物事の捉え方が半ば永続的であり、それが現在の生活満足度や将来展望という現在、未来に対しての考え方にも同じように影響を与えているためではないかと考えられる。心理的背景や葛藤などを捉えなおすことによって将来展望や現在の生活が肯定的になることから、過去のライフイベントの捉え方や人生で培ってきた心理的背景が、将来展望や死そのものに対する態度や死後の世界のイメージと密接に関連していることがうかがえる。

事例Aにおいては自分の劣等感からくる過去の出来事への否定的感情が現在も続いており、特に家族への劣等感、否定的な感情が現在の生活や将来展望を暗くしているといえる。事例Aは過去の葛藤を現在まで解決できておらず、その葛藤が将来展望を「絶望」的なものにしてしまうと考えられ

る。事例Bにおいては過去から一貫した物事、出来事への感謝が信仰によってこれまで支えられてきたため、現在の生活や将来展望においても感謝重視の考え方が続いている。事例Bにおいては過去から続く一貫した物事の捉え方が影響を与えているパターンであるといえる。事例Cにおいては幼い頃の母への否定的な感情を自分が親になり、母親の立場に立つことで母親を理解することができ、死を母親に会いに行くこと、また遣り残したこととして親孝行をあげるなど、葛藤を解決しているといえる。事例Cは過去の否定的な感情を他者の視点に立つことで解決し、現在の生活や将来展望に肯定的な影響を与えたパターンであるといえる。事例Dは仕事を生きがいとしており、足を痛めたことでショック状態に陥るものの、自分の中の仕事の価値を捉えなおすことにより、新たな生きがいを模索しようとしている。

このように形は違うが、過去の捉え方、また捉えなおした結果が現在の生活や将来展望に影響を与えているといえる。

5. 総合考察と今後の課題

本研究では高齢者の過去の出来事に対する捉え方、現在の生活に対しての捉え方、死に対する態度、将来展望を把握すること、またそれぞれがどのように関連しているのかを調べることで、死の受容や態度がどのような要因と関連しているのかを質的に捉えるとともに、その考え方が現在の生活や、過去の様々な出来事などどのように関連しているのかを検討することを目的とした。

まず、過去の出来事に対する捉え方、特徴については4人に共通して見られたものとしてまず「お寺への参拝」が挙げられる。これは高齢者の子供時代にお寺が地域に密着していたことを示し、これは高齢者特有の特徴といえる。また現在の生活については共通して「満足」という特徴が見られたが、うち2名は「家族への思慮」という特徴が抽出されており、高齢者にとっての家族の問題が生活の大きな部分を占めることも明らかになった。また過去の出来事の捉え方と現在の生活や将来展望との関連性については過去の捉え方、また捉えなおした結果が現在の生活や将来展望に影響を与えているといえる。事例Cにおいては母への否定的な感情を他者の立場に立つことで母親という存在を捉えなおし、理解することができ、死を母親に会いに行くことと捉えることができるようになり、事例Dは仕事ができなくなったショックを、仕事への価値を捉えなおすことによって新たな生きがいを模索しようとしている。事例C,Dにとってこれらの葛藤を抱えたままであったら、このような死に対する態度や将来展望を持つに至らなかったのではないかと考えられる。つまり、過去に葛藤を持っていてもその葛藤を解決することや過去の出来事を捉えなおすことによって、過去の満足度が高まり、現在の生活や将来展望が肯定的なものになることが明らかになった。これは長田(1989)の過去の満足度が高い人は現在満足度、未来展望ともに高いという結果に一致する。

また死の恐怖を失くす要因として本研究では「宗教の存在」、「身近な人の死」、「死後の世界の存在」という3要因が明らかになった。これは幼い頃から触れてきた宗教、信仰をベースにし、死後の世界を肯定的なもの、「たとえば死に別れた人が待っている場所」、「いいところ」と捉えることにより、また他者の死を多く経験することで人間の死の普遍性を、身をもって理解することにより、死への不安が少なくなるものと考えられる。死への恐怖を低減する要因と過去の出来事の関連については死後の世界などはそれぞれの死への触れ方、他者との死別経験、自分の生き方などと関連す

ることが明らかになった。

本研究の問題点として、まず調査対象者の数の問題が挙げられる。本研究の調査対象者は4名であり、高齢者一般の特徴として提示するには十分ではなかった。今後、調査協力者の数を増やすことが必要であると思われる。また、本研究では傾聴に徹したため、心理療法的なかわりは行っていない。そのため語ることそのものの変化が見られなかったと思われる。そこで今後は心理療法的なかわりを行い、事例Aのような否定的な葛藤を持ち続ける高齢者への援助が必要となってくると思われる。また、今後の課題として今回は高齢者についてのみの調査であったため、各年代におけるこれまでの人生の捉え方や死に対する態度、それに関連する要因を調査することが必要であると思われる。

引用文献

- Butler, R. N. (1963) The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-75.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York :Norton. (仁科弥生 (訳) (1977,1980). 幼児期と社会 1,2 みすず書房)
- Kubler-Ross, E (1969) *On Death and Dying*. Simon & Schuster/Touchstone. (川口正吉(訳) (1971) 死ぬ瞬間 読売新聞社.
- 柏木哲夫 (1982) 死の臨床におけるチームアプローチとホスピスの役割 心身医学, 22, 512-516.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996). 老年期における死に対する態度 老年社会科学, 17, 107-116.
- 河野友信 (1994) 死の臨床 心身医学, 34, 233-237.
- 長田由紀子・長田久雄・井上勝也 (1989) 老年期の過去回想に関する研究1: 回想の量・質・機能の種類と特徴 老年社会科学, 11, 183-201.
- Peck, R. C. (1955). Psychological development in the second half of life. In B. L. Neugarten (Ed.) (1968). *Middle age and aging*. Chicago: University of Chicago Press.
- 田中愛子・岩本晋 (2002) 老年期に焦点を当てた死生観・終末期医療に関する意識調査 山口県立大学紀要, 119-125.
- Woods, N.&White, K.L. (1981) Life satisfaction, fear of death and ego identity in elderly adults. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 18, 165-168.